漱石枕流　解答

A　語句の意味と読み

(1) 若いころ。 ／★「少」は「すくない」ではなく「わかい」。「年少（ねんしょう）」「少年」の「少」と同じ

(2) 世間（名声や出世を求める世の中）から離れて、山や川のほとりなどでひっそりと隠者として暮らすこと。 ／同じ話をのせる『晋書』では「隠居」と書かれている。⑤の「石に枕し流れに漱（くちすす）がん」は、その暮らしぶりを表した言葉

(3) 枕にして（寝て）。「石に枕す」で、石を枕にして寝ること。 ／「枕」はここでは名詞ではなく、「枕す（まくらす）」というサ変動詞として使われている

(4) 口をすすぐ（口の中を水で洗い清める）。「流れに漱ぐ」で、川の流れの水で口をすすぐこと。 ／「すすぐ」と読む本もある。夏目漱石の「漱」の字

(5) まちがえて（言いまちがえて）。 ／何をまちがえたのかは、⑤と⑦を見くらべるとわかる

(6) （刃物をとぐように）みがく・とぐ。 ／「礪」はもとは砥石（といし）のこと。「とぐ」と読む本もある。『晋書』では「厲」の字になっている

B　句法

(7) 「〜しようと思う・〜したい」。願望・意志を表す。 ／白文は「欲隠」。下の動詞を未然形にして「ん（む）と」をつけ、「欲す」へ返って読む。⑫⑭の「〜んと欲すればなり」も同じ形

(8) 再読文字。「まさに〜べし」と読み、「当然〜すべきだ・きっと〜だろう」の意。 ／★一度目は副詞「まさに」、二度目は助動詞「べし」。この本文では「べし」が連体形「べき」になり、逆接の「に」がついて「当に〜とすべきに」＝「（本来なら）当然〜と言うべきなのに」の意味（「とす」はここでは「と言う」の意味）。すぐあとの「誤りて」につながる。『晋書』では孫子荊の言葉が「当欲枕石漱流」となっているように、「当」を孫子荊の言葉の一部と見て「『当に石に枕し流れに漱ぐべし』と」と読む本もある。お使いの教科書に合わせること

(9) 「可」／〜できる（可能）。 ／「可」は「べし」と読む。「流れは枕すべく」＝流れは枕にすることができ

(10) 「乎」／疑問の読み方（〜できるのか）。 ／★「可〜乎」の形。疑問の読み方は「〜べきか」、反語の読み方は「〜べけんや」（次の設問）。⑧とあわせて「流れは枕にでき、石で口をすすげるというのか」と問いつめている。意味のうえでは「できるはずがない」とからかう気持ちがこもるので、反語として説明する本もある。お使いの教科書に合わせること

(11) 書き下し＝「石は漱ぐべけんや」（文全体を「流れは枕すべく、石は漱ぐべけんや」と書いてもよい）／意味＝石で口をすすぐことができようか、いや、できない。 ／★反語は「いや、〜ない」まで訳に出す。この話は疑問で読む本と反語で読む本がある。お使いの教科書に合わせること

(12) ゆえん／理由・わけ（「〜する所以は」＝〜するわけは）。 ／★「それゆえ（だから）」と取りちがえない。白文は「所以枕流」で、下の「枕流」を先に読んでから「所以」へ返る

(13) 「〜だからである」と理由を言い切る。⑪「〜する所以は（〜するわけは）」を受けて、「（それは）〜したいからだ」と答える形になっている。 ／「所以は〜ばなり」でひとまとまり。⑬⑭も同じ形の対句になっている。白文に「也」の字はないが、理由を答える文なので「なり」を補って読む

C　主語・指す内容

(14) 主語＝孫子荊／語った相手＝王武子。

(15) 「孫」＝孫子荊／王武子（本文の「王」）の言葉（⑧⑨）に答えている。 ／本文の後半は、字（あざな）をはぶいて「王」「孫」と姓だけで呼んでいる

(16) 孫子荊自身（流れを枕にして寝る本人）。 ／「其の」＝「その人の」。⑭「其の歯」の「其」も同じ

(17) 孫子荊の言葉の⑦「石に漱ぎ流れに枕す」。 ／⑦の言い方をそのまま取り上げて、「流れは枕すべく」「石は漱ぐべきか」と問い返している

D　口語訳

(18) 孫子荊は若いころ、（世間を離れて）隠者として暮らしたいと思っていた。

(19) 王武子に話すとき、本来なら「石を枕にして寝て、川の流れで口をすすごう」と言うべきところを、まちがえて「石で口をすすぎ、川の流れを枕にする」と言った。※「当」を孫子荊の言葉の一部と見て読む本では、「王武子に『（これからは）石を枕にし、川の流れで口をすすぐ暮らしをするのがよい』と（言おうとして）、まちがえて『石で口をすすぎ、川の流れを枕にする』と言った」のように訳す。

(20) 流れは枕にすることができ、石では口をすすぐことができるというのか。（反語に読む場合は「流れを枕にしたり、石で口をすすいだりできようか、いや、できはしない」。）

(21) 流れを枕にするわけは、（自分の）耳を洗いたいからだ。石で口をすすぐわけは、（自分の）歯をみがきたいからだ。

漱石枕流　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22) 「枕す」と「漱ぐ」の相手（石と流れ）が入れかわっている。本来は「石を枕にし、流れで口をすすぐ」と言うはずが、「石で口をすすぎ、流れを枕にする」と逆に言ってしまった。 ／白文で見ると「枕石漱流」→「漱石枕流」。動詞の「枕」と「漱」の位置が入れかわっただけで、意味が通らなくなる

(23) 流れる水を枕にすることも、石で口をすすぐこともできるはずがないと、孫子荊の言いまちがいを指摘して、からかったということ。 ／同じ話をのせる『晋書』では、この部分が「流れは枕すべきに非ず、石は漱ぐべきに非ず」と、はっきり打ち消す形になっている

(24) 誤りを素直に認めない負けず嫌いだが、とっさにうまい理屈で言い返す機転のきく人物。(四十字) ／「負けず嫌い（負けおしみが強い）」と「とっさの理屈・機転」の二つを入れる。参考：『世説新語』の古い注（梁の劉孝標の注）は、「耳を洗う」のところに、隠者・許由が川で耳を洗った話を引いている

F　文学史・故事

(25) 『世説新語』(排調篇) ／南朝宋の劉義慶。 ／後漢の終わりから東晋までの人々の言葉や行いを集めた本。同じ話は、唐の時代に編まれた『晋書』の孫楚伝にもある

(26) 字（あざな） ／★名を直接呼ぶのは失礼とされたため、ふだんは字で呼んだ。名はそれぞれ孫楚・王済で、同じ話をのせる『晋書』では「楚」「済」と名で書かれている

(27) 漱石枕流（そうせきちんりゅう）／負けおしみが強く、まちがいを認めずに、こじつけて言いのがれること。 ／★「石に漱ぎ流れに枕す」の形でも使う。本来の言い方「枕石漱流」（隠者の暮らし）と取りちがえない

(28) 夏目漱石（本名は夏目金之助）。 ／明治22年（1889年）、友人の正岡子規の文集『七草集』に漢文で批評を書いたとき、初めて「漱石」と名のったとされる

【現代語訳（全文）】

孫子荊は若いころ、(世間を離れて）隠者として暮らしたいと思っていた。(友人の）王武子に話すとき、本来なら「石を枕にして寝て、川の流れで口をすすごう」と言うべきところを、まちがえて「石で口をすすぎ、川の流れを枕にする」と言ってしまった。

王武子が言うには、「流れは枕にすることができ、石では口をすすぐことができるというのか。」と。

孫子荊が言うには、「流れを枕にするわけは、耳を洗いたいからだ。石で口をすすぐわけは、歯をみがきたいからだ。」と。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる